酪農地帯の形成過程(I)

——北海道演習林（標茶区）をめぐる地域性の研究——

北尾邦伸

Historical Process of Forming of Dairy-Farming Zone, Eastern Hokkaido

——Area Studies for the Management of Experiment Forests of Kyoto University——

Kuninobu KITAO

要　　旨

京大北海道演習林が設置されている道東で，近年，普遍的な土地利用形態となった酪農業の形成過程を認識するために，最寄の弥栄地区を事例的にとり上げて実態分析をした。

全体構成を目次として示すと次の如くである。

I．はじめに—問題意識—　II．標茶町の概況および「前史」　III．北海道酪農業における道東の位置　IV．弥栄地区にみる酪農業発達史　(i)緊急入植・開拓者農業時代（昭和20年代）〈以上本号，以下次号予定〉　(ii)主畜農業時代（昭和30年代）　(iii)専業草地酪農時代（昭和40年以降）　V．弥栄地区にみる酪農業の現段階　(i)個別経営視点からの農家の実態と問題点　(ii)「地域酪農」視点からの実態分析　VI．総括

弥栄地区の酪農業は，開拓者農業→主畜農業→専業草地酪農へと発達してきたのであり，林業的には，それに照応して製炭時代→造林時代→脱林業時代へと推移してきている。

林業雇用労働力的には，現段階の弥栄にはほとんど期待できず，演習林の造林作業は，このような酪農業形成過程で地域に片方で形成されてきた林業賃労働専業集団に，請負に出す形で進められるに至っている。

I　はじめに——問題意識——

本小論の第1の目的は，京大北海道演習林（標茶区）が置かれている「地域」への，社会・経済学的接近にある。

筆者は現在，当演習林に勤務しており，当演が多くの問題を抱えていることを痛感しているが，その緊急で最大の課題は，演習林の存在意義を，そして，経営目標をいま少し明確にしていくことにあると思われる。

演習林の存在意義は，学生の教育・実習用に，そして，個々の教官による主体的な個別試験研

究（この「自由」さを保証することの重要性は，常に確認しておかねばならないけれども）用に供せられるところにのみあるのではなく，何よりもそれらを包摂しての一つの生産組織体として機能する点にあると筆者は考えている。すなわち，教育も個別試験研究をもその中に溶かし込んでしまえるような，生産実践体（事業規模での経営試験体）としての主体の確立が，現在，何よりも必要な状態にある。

京大北海道演習林が戦後当地に設置されて30年余になるが，いまだ経営目標を明確に掲げて構成員間で意思確認をし，その目標に向けて組織的に取り組むという歴史を有したことがない。そして今，筆者は筆者なりに，この生産組織体としてのとるべき経営目標を模索しなければならない立場にあると考えている。

ところでこの経営目標は，ある程度固定的なものとして組織を拘束しなければ意味がないが，しかし，ある場合には科学技術的研究成果を踏まえて，またある場合には演習林をとりまく社会経済的諸条件の変化の中で，常に問い直し，位置づけ直さねばならぬものとしてあることも確かである。

社会経済的諸条件の変化は，何よりも当演習林が置かれている地域を介して現われるし，この地域の中でなされてきた事業規模での経営試験の成果は，まずもって当地域に還元されるべきものとしてあるであろう。しかるに，これまでの演習林当局には，このような「地域」認識が欠如していたと云っても過言ではない。

本小論はこのような状況のもとでの，当演習林をとりまく「地域」認識への社会科学的接近であるが，本小論のような迂回路を一度通っておくことによって，片方で進めている当演習林戦後30年の「経営史」的把握が，より鮮明なものとなると考える。また，将来の経営計画（経営目標の具体化）の設定の際にも何がしかの役に立つのではないかと考える。

ところで，何故に事例調査地を最寄の弥栄地区にとり，かつ，当地域をまずもって酪農地帯の形成過程として認識しようとしたのかについて述べておこう。

演習林において土地は，林業的に利用することが不文律的に決っているのであるから，演習林経営をとりまく地域性を，木材流通や林業労働力の地域構造として押える方が研究の〝生産性〟が高いかも知れない。

しかし，新転地として当地に赴任して来た筆者にとっては，「道東は酪農地帯なのだ」という印象が強烈であり，その圧倒的な風景が，筆者をしてそうはさせなかった。当演習林もほぼ周囲を牧草畑に囲まれているし，また，道東の基幹産業は，現在，明らかに酪農業である。

これまで幾多の入植民を排除し続けてきた日本一自然条件の厳しいこの限界地に，牧草と牛を介して人々がはじめて定着し，この地の自然をも産業化しえてきたこの過程には，美しい風景の展開とは裏腹な，死斗にも似た「労働」と「歴史」が存在しているに違いないとの思いがあるのである。

ところで，丘陵状の山の稜線にまで牧草地が伸展し，それらが天然林と人工林とともに混在しているこの地の風景は，「内地」都府県の山村に馴んできた筆者にとって変ったものに映って仕方がない。「内地」都府県の山村では，田畑が平坦部にひらけ，そして沢添いの民家に近い部分から奥へ竹林→人工林→天然林との林相展開が見られたはずである。ここ北海道では，土地利用区分は地形的特徴によって確定するのでなく，経済的条件に応じて定まっていることは，注目すべきことであろう。

拓殖行政下の戦前の北海道林業を垣間見ても，牧場名義での国有未開地処分地がその後植樹地へと起業目的の変更が行われることによって，また，そのような手続きもなく牧場の荒廃の結果として森林化することによって，広汎な私有林が形成されてきた[1]ことを知る。また，戦後の経

済高成長期に特にこと北海道では，農廃地造林が一方において広汎に展開してきている[2]のである。このように北海道では土地利用をめぐって農業と林業とが激しく交替・交差しあう歴史を有しており，将来においてもなお流動的と云える状態にあるのである。

かつ，当演習林も周辺農家の酪農業への発展過程の一時期には，相当強力な林地解放要求に直面したし，酪農発展の現段階においても根強くその要求は持続している（53年11月19日付の署名要求あり）と見てよいであろう。

さらに，当演習林と“酪農”との関連性で付記しておけば，設立当初の『京都大学北海道演習林における試験研究概要』の筆頭には，「混牧林業試験」が掲げられており，「混牧林業の経営は北海道開発に対して重要なる一つの研究課題である」と明記されている。

ところで，弥栄は当演習林と同じく戦後に，旧陸軍軍馬補充部地へ入植した人々によって形成された集落で，彼等の大半は「外地」（旧満州）からの引き揚げ者によって構成されている。「外地」演習林（特に樺太演習林）を喪失して必死の思いで[3]この地に北方林業の研究基地（そして，「外地」演習林に勤務していた職員の就労の場）を確保した本演習林も，まさに彼等と同様の“戦後緊急入植者”なのである。このような「隣人」の発展ぶりは，大いに気にかかって当然であろう（近年の当演習林の年間収入は，弥栄農家の１戸分のそれにも満たない）。

さらに，当演習林の官行斫伐時代には，林業労働面で（馬搬，収獲調査等）弥栄地区の農家に依存するところが大きかったし，入林監視体制，火防巡視体制の面でも大いに依存してきている。弥栄は，当演習林にとって最もつながりの深い集落と云えるのである。

この弥栄地区は入植者によって森林が伐り拓かれ，現在，専業酪農業による酪農地帯が形成されるに至っているのであるが，この形成過程で「林業」はいかなる位置を占めたかは，また，林業サイドに身を置く者にとって気になることである。

本町に所在する標茶営林署は，全国にその名を知られた「パイロット・フォレスト」[4]を擁しているが，これはもともと根釧地域の「寒冷農業経営の安定のための指標林」として命名されたものである。すなわち，当時「寒冷なこの地方の農業経営は，今後においては是非とも林業を取り入れた農，畜，林の多角経営で進む以外に営農は成立しない」と考えられ，その一方で農家が「もっとも手掛けやすいと考えられるカラマツ造林に対してすら，年々野鼠の害等による不成績のため，全く自信を失っている」といった状態にあったために国有林が，「立派な造林地を早くつくり，民間の農家の人々に模範を示さなければならない」[5]として取り組まれたものである。

また，北大の加納瓦全らは一連の「開拓地農家経営における農林提携に関する実態調査」を行ない，当弥栄開拓地にも28年に調査に入り，「林野を切り離しては農家経営は絶対に成り立たない」との「農林提携」の視点から，「農家経営の内部において耕種，畜産，林業の三者がいかなる有機的結合を保ちつつ営農が進められつつあるかを観察研究」した論文[6]を発表している。

昭和30年前半まで当地域は，このような「時代」としてあってのであり，本小論の第１の目的は要するに，このような「時代」と現在との間にはどのような時代差が生じ，また，そのプロセスはどのようなものであったかの歴史的輪郭を描き，当演習林が置かれている「地域」性の認識を深めようとしたものである。

ところで，全く素養のない酪農業に関する実態調査を今回やってみようとした背後には，上述したものとは少々異なる問題意識も存在した。このことに関して次に触れておく。

近年，林業政策の中心は「地域林業」の育成強化へと転換してきており[7]，今や研究者においても種々の「地域林業」論が流行の域にまで達している。

地域を見直しの舞台とする「地域林業」視点を要求する現実性が，確かに存在しているのであるが，これら「地域林業」政策論の陰には，先行する形で提出され実行されてきた「地域農業」，

「地域農政」からの影響が強く作用し，時にはこの受け売り的「地域林業」論も流布している。

このような状況のもとで最近，「地域農業」政策（そして地域主義）からの発想の「夾雑物」を取り除いて，林業政策の現段階の本質的把握に迫らねばならないとする観点からの論文[8]と，「地域農業」論と意識的に対比することによって「地域林業」論の座標軸を定めようとする試み[9]が現れた。

筆者にはこれら問題提起は興味深く，機会をつくって一度，農業および農政の近年の展開を地域レベルで具に観察してみたいと考えていた。そして，生産力的にも日本一ダイナミックスな発展を遂げてきているように見うけられるここ道東の酪農業は，その格好の素材として目前に横たわっていた。

以上提出した問題意識に対する充分な調査研究成果が得られたかどうかについては，不慣れな酪農業に関するものであったが故に甚だ疑問である。課題設定および分析の深化は，また他日を期すしかない。

本章の最後に，快く聴き取り調査に応じて下さった弥栄の酪農家の皆様，色々の御配慮を賜わった標茶農協弥栄事業所，統計情報事務所標茶出張所，標茶町役場の各位，その他お世話になった多くの人々に，ここに誌上を借りて心よりの御礼を申し上げる次第である。

Ⅱ　標茶町の概況および「前史」

標茶町は北海道の道東部に位置し，釧路市より北東に約50km内陸に入った所に町の中心街をもつ農村である。行政面積は11万haに及び，「農業基本調査」のための地域区分で云えば標茶周辺，磯分内，虹別，阿歴内・塘路，御卒別，沼幌，久著呂，上多和，茶安別から構成されている（図1，図2参照のこと）。

標茶の名はアイヌ語の「シペッチャ」（大きな川の端の丘）を語源としており，それが示すように地形的には，千島火山帯の影響を受けた丘陵地と釧路川下流域を中心とする（他に西別川，別寒辺牛川の水系の川が入り込む）平坦地に大別でき，釧路川下流域では湿源が形成されている。丘陵部は山岳は少なく，標高60m～300mで，多くは丘陵起伏状の地形をなしている。

地質は概ね第4期古層に属し，摩周系火山灰土で覆われているが，河川成沖積土壌が河川沿の平坦地に一部散在しており，また，釧路川流域には地下水位が極めて高い低位泥炭が分布している。

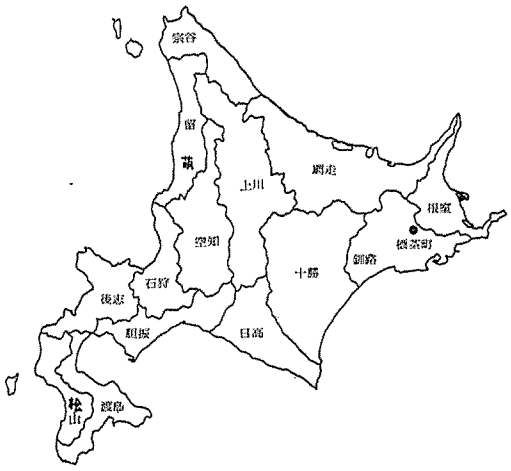


図1　支庁別北海道地図と標茶町の位置

気象的に本町は，根釧原野特有の状況を呈する。月平均の最高気温は20°C程度であり，春期は気温上昇が遅く，夏期は太平洋釧路沖に発生する海霧の影響（南風が運び込む）で冷涼寡照。夏期の作物成長期の平均温度が13.7°Cと極めて低い。秋期から冬期にかけては晴天が多く，乾いた北西季節風の寒風が吹走し，降雪量は少ない。無霜期間は短かく（6月にもしばしば晩霜をみる），厳寒期には最低気温が－30°C近くに下がることも珍らしくない。根雪が遅いこともあって冬期の土壌凍結の深さは70cm～80cmに及び，5月に入っても容易に解凍しない。よって植生繁茂が遅れ，一

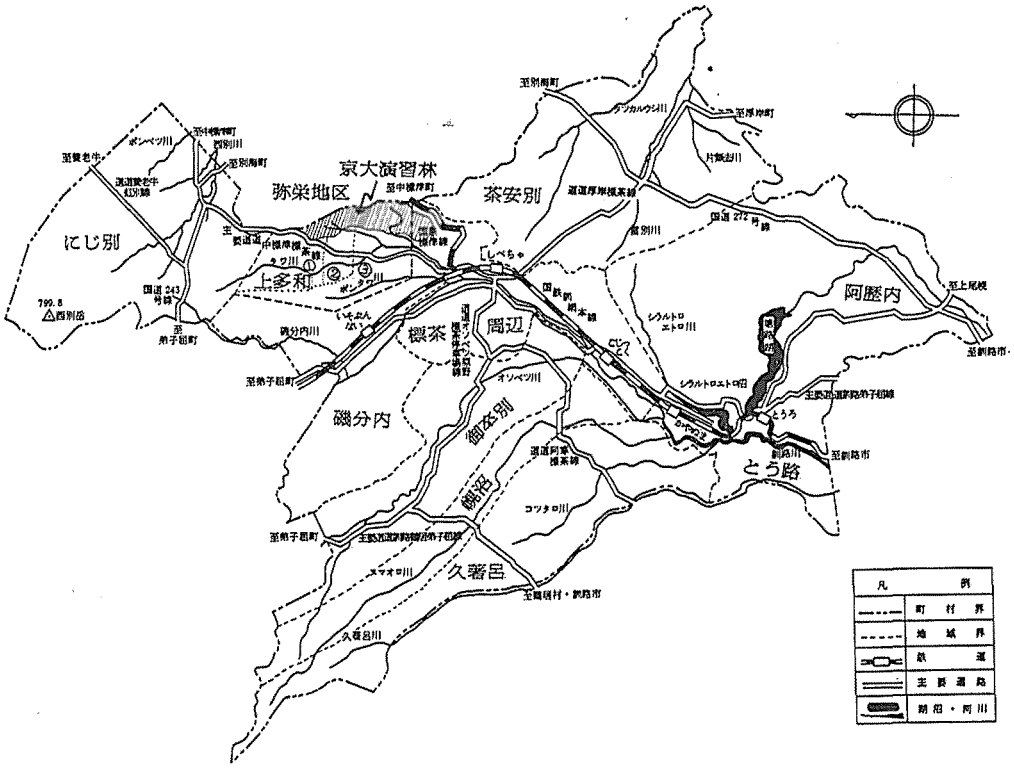


図2　標茶町地図

方で内陸性気候特有の日中温度の急上昇，相対湿度の低下（10%を切ることもあり）が起こるために，この時期は山火事が異常に発生しやすい自然条件となる。降雨量は年間1,000 mm 程度で，夏から初秋にかけてが多い。年平均気温は5.5°C，温量指数は45°C 程度である。

標茶町の人口は55年1月現在で12,483人（住民基本台帳）。近年その減少率を低下させたとはいえピーク時の17,424人（35年）に較べて4,941人と28%を減じたことになる。35年段階で1,548戸だった農家は，55年には746戸に減少している。

現在の産業別の就業人口および生産額を示しておくと表1の如くであり，農家戸数は減じたとはいえ酪農業による第1次産業がこの町の基幹産業であることに変わりはない。第2次産業は，雪印乳業磯分内工場による乳製品加工および製材業，淡水魚の水産加工業（塘路湖のワカサギ）等である。

土地利用の現状についても簡単に述べておくと，総面積110,745 ha の地目別内訳は農用地

表1　標茶町の産業別就業人口および生産額（昭和54年1月現在および昭和53年度）

	総　数	第1次産業	うち農業	第2次産業	第3次産業
就業人口 （比　率）	6,220人 (100.0)	2,259 (36.3)	1,915 (30.8)	1,360 (21.9)	2,601 (41.8)
生産額 （比　率）	36,389百万円 (100.0)	9,010 (27.0)	8,898 (26.6)	14,886 (35.6)	12,493 (37.4)

・『標茶町農村総合整備計画書』（昭和54年10月）より作成。

26,678 ha（畑地21,980 ha，採草放牧地4,698 ha），宅地等532 ha，山林原野67,908 ha（うち林野庁所管25,565 ha，町有林4,699 ha，京大演習林1,442 ha），その他15,627 ha で，農家１戸当りの経営面積は34.5haとなっている[10]。

次にこの標茶町の歴史を，この地の風土を理解するために，そして主題である戦後段階の「前史」として必要な限りで素描しておく。

標茶町は古来，少数のアイヌ（「旧土人」）が塘路，虹別に小部落を形成しており[11]，他に数戸のアイヌ民家が散在していた所であるが，安政年間に久寿里（釧路）場所の請負人であった佐野孫右衛門が鮭番屋を建てて番人を置き，これが和人居住の嚆矢であった[12]。

その後，明治18年に塘路に戸長役場が設置され[13]，熊牛村外四ケ村として統治されて和人による本格的開発が開始されるのであるが，戦前期は集治監・硫黄精錬時代と軍馬補充部時代とに画されよう。

標茶の歴史は，集治監の囚人労働による開基的開発を抜きにして語ることはできないが，昭和28年に建立された「標茶集治監死亡者之碑」には次の一文が刻まれている。すなわち，「本道開拓の初め明治18年９月拓殖行刑を計って道東原野に釧路集治監の開設を見る。規模二千名を収容し，経営の難死地に活を求むるが如し。……爾来16年，道路を通じ河川を治し鉱業を興し功業顕著なるものがあった。が可惜（あたら）命を北境に献じ家郷再帰を見るに至らぬ者尠（すくなか）らず。同34年９月，当地合葬者の数五百名に達し憐憫堪え難きものがある」と。

この囚人労働は過酷を極めたものであった[14]が，「賊徒」[15]等の徒流刑の重罪人が激増してその収容に頭を痛め，一方で北海道拓殖進捗の必要性を痛感していた当時の政府にとっては，「労役ニ堪ヘズ斃死スルモ……萬已（ばんや）ムヲ得ザル政略ナリ」（金子堅太郎による北海道三県巡視復命書）として遂行されたのである。

ともあれ樺戸，空知に次ぐ北海道三番目の集治監として明治18年に釧路集治監が標茶に設立され，同34年には網走へと移転をみるのであるが，特に東北海道の重要幹線道路は，まさにこれら集治監に収容され，厳寒の地での労力を強いられた囚人達の命とひきかえに開削されたと云っても過言ではない。

硫黄事業に関しては当初（明治11年から創業）は前述の佐野孫右衛門によって現弟子屈町に属する川湯のアトサヌプリ（硫黄山）において採掘が行われていたが，函館銀行の山田慎を経て，（この間硫黄の採掘に大量の囚人が悲惨な状態で就労させられる）明治20年にその経営権は，安田善次郎（のちの安田財閥の始祖）に移る。彼は同年に標茶に精錬所を設置し，川湯～標茶間43.4 km に道内で３番目の鉄道として「釧路鉄道」を敷設する（製品は標茶から舟運を利用して釧路に送られた）。当時全道屈指の生産高を誇ったが，その後10年足らずの略奪経営の後に安田は転進し，明治29年に精錬所は廃止，鉄道の運行も停止される。

なおこの間，ドロノキ，シナノキ等の天然林を利用しての明光社なるマッチ軸木工場が27年に開設（同32年に閉鎖）されている。明治27年時点で戸数370戸，人口5,600人に達し，市街地も形成されて釧路に匹敵する賑わいを呈していたという。

しかし，その後上述したように精錬所の廃止，集治監の網走への移転等が相次ぎ，一時は人口400人（38年）の「動けぬ者だけが残った」村にと疲弊する。そして，この廃村状態を救ったのが，明治41年の陸軍軍馬補充部の川上支部設置であった。

この軍馬補充部は本部を東京に置き，本部長は陸軍大臣の隷下にあった。日露戦争の勝利とその後の特に中国大陸への露骨な侵略政策を背景にして整備拡張されていったもので，その使命は２才馬を民間から購入（「お買い上げ」）して５才まで育成訓練し，これを各師団に補充することにあった。従って業務の大半を占めるものは育成馬の管理であり[16]，寡雪地帯でかつミヤコザサ

が繁茂するこの地方は，格好の放牧地を提供していた。

この川上支部の放牧地は川上放牧地，磯分内放牧地，多和放牧地[17]，風蓮放牧地の4つから構成されており，戦後大蔵省に移管された時点で見ると総面積は約1万8千haに及んでいた。育成規模は大正末期には千頭を越え，昭和13年の記録では1,659頭を数えている。この管理に当たる職員には「牧手」,「耕手」（農耕飼料をつくる）といった「傭人」を中心に120名（昭和13年）を擁し，この他に200人を超える「臨時人夫」を使用していたのである。

この川上支部の購入馬の生産地は道東の各地に及び，道東はさしづめ「馬産王国」であった。そして大楽毛（おたのしけ）（現在釧路市に所属）には馬の一大集散地市場が成立していた。軍馬補充部川上支部は，この地の主産地形成に大きな役割を果していたと云えるのである。

ところでこれら馬産は，馬産家ないしは農家によって，官林や国有未開地への無断放牧によって生産される場合が多かったと云われ，それらの土地は「帝国牧場」とか「日の丸牧場」と呼ばれていた。熊牛村における有畜農業も，「実にこの帝国牧場によって発展したと称しても過言ではない」[18]と云えよう。

一方，本町への最初の農業開拓移民の入植は，明治25年の塘路への香川県人の集団によって始まっている[19]。その後徐々に増加していくのであるが，一大進展をみるのは昭和3年～6年の許可移民[20]の受け入れ期を待たねばならなかった。とりわけ虹別地区では，この期に377戸が集団入植をしている。そして，町全体として昭和10年には戸数1,682戸，人口8,627人を数えるに至るのである。

釧網線は，昭和2年に標茶までの開通を見ている。同10年には日本甜菜糖磯分内工場が，13年には帝国製麻標茶亜麻工場が操業を開始し，町はここに農業によって新たなる発展段階を呈するようになるのであるが，これは戦後，約34,800ha の未開拓農地および軍馬補充部跡地に，730戸もの緊急開拓民を迎え入れて本格化していく。

Ⅲ　北海道酪農業における道東の位置

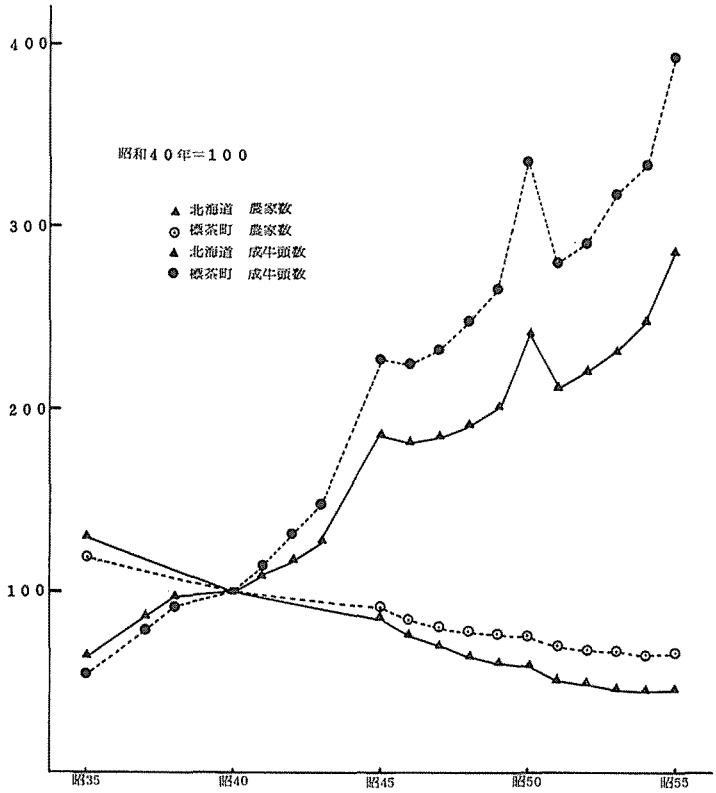
本章では2，3の統計資料を用いて戦後の北海道酪農の大きな流れを鳥瞰し，その流れの中で道東はどのような位置を占めてきたかを見ておきたい。

図3は，全道と標茶町の乳牛飼養農家数および飼養成牛頭数の推移を示したものである。農家数の減少傾向と飼養乳牛の多頭化現象は一目瞭然であろう。

昭和40年時点で北海道の酪農は「成牛5頭規模」となり，従来の副業的零細性を脱却して経営の主要部門として成立した[21]と見てよいであろう（全道平均で1戸当り4.2頭）。そしてそれ以降飼養頭数は，「ゴールなき拡大」と表現される急成長を示すことになる。昭和55年には成牛飼養頭数が，全道で50万頭弱と40年の2.9倍に，同じく標茶町のそれも2万1千頭と3.9倍になってくる（表2参照）。

一方，乳牛飼養農家数は現在まで確実に減じてきている。全道で40年の46％に，標茶町でも40年の66％にとなっており，これらの結果当然にも，一戸当り飼養乳牛頭数の伸びは全体として量の伸びを上まわったものとなっている。昭和55年で，全道では40年の6.3倍の26.4頭/戸，標茶町でも5.9倍の32.5頭/戸の成乳牛が飼養されるに至っているのである。

そして，この農家戸数の減少と一戸当りの飼養頭数の増加は，いわゆる「分解基軸」を明瞭に持って展開してきている。すなわち，ある飼養規模層以下の農家数は前年より確実に減少し，それ以上の層は確実に増加しているという基軸が常に存在し，その基軸が年々上昇をしてきたのである。



・農業基本調査，センサスより作成。

図3　北海道および標茶町における成乳牛飼育農家数とその頭数の推移

表2　北海道および標茶町における乳用牛飼養状況の推移

		昭和35年	40　年	45　年	50　年	55　年
北海道	乳牛飼養農家数(戸)	57,774(125)	46,220(100)	37,739(82)	25,563(55)	19,344(42)
	飼養乳牛頭数(頭)	181,610(64)	282,873(100)	448,976(159)	591,799(209)	701,496(248)
	成牛飼養農家数(戸)	52,963(130)	40,710(100)	34,665(85)	23,834(59)	18,553(46)
	飼養成牛頭数(頭)	〈108,966〉(64)	170,915(100)	315,780(185)	412,070(241)	489,437(286)
	平均1戸当り成牛頭数(頭)	〈2.1〉(50)	4.2(100)	9.1(217)	17.3(412)	26.4(629)
標茶町	乳牛飼養農家数(戸)	1,244(116)	1,076(100)	941(87)	777(72)	672(62)
	飼養乳牛頭数(頭)	4,964(54)	9,215(100)	17,776(193)	25,134(273)	30,659(333)
	成牛飼養農家数(戸)	1,198(118)	1,013(100)	926(91)	764(75)	668(66)
	飼養成牛頭数(頭)	〈2,978〉(54)	5,539(100)	12,591(227)	18,593(336)	21,677(391)
	平均1戸当り成牛頭数(頭)	〈2.5〉(45)	5.5(100)	13.6(247)	24.3(442)	32.5(591)

・〈　〉内は，35年統計に成牛に関する数値が計上されていないために，40年の総乳用牛に対する成牛の比率を用いて算出した数値である。
・(　)内は，40年時を100とした指数。
・農業基本調査およびセンサスより作成。

表3　北海道における成乳牛飼養階層別農家数の推移

	昭和40年	45　年	46　年	47　年	48　年	49　年
成乳牛飼養農家総数	40,710(1,013)	34,665 (926)	30,987 (851)	28,427 (814)	25,946 (777)	24,261 (765)
1～4頭	25,887 (423)	10,212 (92)	7,613 (50)	6,140 (50)	4,934 (43)	4,136 (45)
5～9	12,347 (486)	10,518 (182)	9,142 (165)	7,700 (126)	6,380 (78)	5,231 (74)
10～14	2,104 (92)	7,453 (274)	7,071 (240)	6,206 (171)	5,418 (173)	4,574 (114)
15～19	358 (12)	3,735 (195)	3,856 (197)	3,895 (200)	3,910 (180)	3,702 (161)
20～24		2,275 (158)	2,705 (153)	3,327 (202)	3,885 (225)	2,878 (149)
25～29						1,664 (103)
30～39	14 (0)	444 (25)	456 (37)	820 (46)	1,039 (62)	1,461 (79)
40～49			144 (9)	337 (19)	380 (16)	615 (40)
50頭以上		28 (0)				

	50　年	51　年	52　年	53　年	54　年	55　年
成乳牛飼養農家総数	23,834 (764)	20,881 (711)	19,769 (682)	18,834 (678)	18,150 (663)	18,553 (668)
1～4頭	3,596 (32)	2,864 (39)	2,354 (26)	1,863 (23)	1,400 (30)	1,445 (21)
5～9	4,189 (49)	3,515 (62)	2,904 (45)	2,311 (39)	1,942 (32)	1,837 (25)
10～14	3,843 (88)	3,430 (89)	2,891 (70)	2,598 (60)	2,217 (40)	1,934 (33)
15～19	3,427 (123)	3,085 (112)	2,842 (115)	2,541 (81)	2,235 (60)	1,926 (47)
20～24	4,823 (231)	2,748 (143)	2,718 (125)	2,569 (119)	2,456 (97)	3,988 (159)
25～29		1,879 (110)	1,989 (107)	2,080 (113)	2,072 (114)	
30～39	3,371 (205)	2,233 (110)	2,560 (136)	2,894 (151)	3,260 (164)	5,606 (304)
40～49		1,127 (46)	1,511 (58)	1,978 (92)	2,568 (126)	
50頭以上	585 (36)					1,817 (79)

・単位は戸数
・（　）内は標茶町
・農業基本調査，センサスより作成

表3はそのことを示している。年によって階層区分の仕方が相違するために少々読みにくいが，例えば46年では15～19頭から上の階層がすべて前年よりも増加し，それ未満層はすべて減少を示している。

全道的に見て昭和45年の分解基軸は10頭附近にあり，46～48年では15頭，49～50年で20頭，51～53年で25頭となり，そして54年には30頭附近にと上昇してきている。すなわち，現在では30～39頭以上層の農家は増加し，25～29頭以下層は減少の一途を辿りつつあると思われるのである。

ところで，先の図3で道全体と標茶町を比較してみると，標茶町の乳用牛数の伸びは常に道全体を上まわり，農家減少率については逆に下まわる傾向にあることが分る。このごく簡単な2つの指標からも，北海道の酪農業はかなりの地域差を持って展開してきたことを推察しうるのである。よって次に，この点を少し考察しておくことにする。

表4は支庁毎にとった飼養乳牛の地域別シェアー（25年と35年の統計には成牛頭数が計上され

表4　飼養乳用牛（含育成牛）頭数の地域別シエアおよび地域別1戸当り飼養頭数の推移

	昭和25年	35　年	40　年	45　年	50　年	55　年
全　道	100.0 (2.1)	100.0 (3.1)	100.0 (6.1)	100.0 (11.9)	100.0 (23.2)	100.0 (36.3)
石　狩	9.3 (3.1)	6.7 (3.3)	5.2 (6.0)	3.9 (11.6)	2.9 (20.0)	2.6 (29.9)
渡　島	8.4 (2.5)	6.2 (3.3)	5.5 (5.1)	4.0 (7.9)	3.3 (13.0)	3.1 (19.7)
檜　山	3.4 (1.8)	2.9 (2.5)	2.3 (4.0)	1.3 (6.1)	1.1 (11.1)	1.0 (17.1)
後　志	3.6 (1.8)	3.1 (2.6)	2.5 (4.8)	1.9 (7.5)	1.5 (13.4)	1.4 (23.9)
空　知	4.3 (1.9)	4.4 (2.3)	2.3 (3.7)	1.2 (6.7)	1.3 (15.8)	1.1 (26.5)
上　川	5.9 (1.6)	7.8 (2.4)	6.4 (4.3)	4.7 (7.6)	4.8 (15.9)	4.4 (25.9)
留　萌	2.9 (1.7)	2.8 (3.0)	3.6 (7.1)	3.6 (15.6)	3.7 (30.1)	3.8 (44.3)
宗　谷	4.6 (2.0)	5.1 (3.4)	6.4 (7.7)	7.2 (15.8)	7.8 (30.0)	7.8 (41.4)
網　走	13.2 (2.0)	14.7 (3.0)	16.4 (5.9)	17.1 (11.5)	16.2 (22.1)	15.2 (33.0)
胆　振	5.7 (2.4)	4.2 (3.4)	3.2 (5.9)	2.8 (10.2)	2.1 (17.0)	2.0 (29.4)
日　高	4.5 (1.8)	5.0 (2.8)	4.1 (4.4)	2.7 (6.8)	1.9 (11.1)	1.8 (20.7)
十　勝	14.0 (1.9)	15.3 (3.0)	18.7 (6.0)	22.2 (11.1)	22.4 (21.9)	23.0 (35.9)
釧　路	11.1 (2.3)	11.4 (4.2)	11.4 (8.0)	12.6 (16.2)	13.4 (29.4)	13.6 (41.5)
根　室	9.1 (2.4)	10.4 (4.8)	12.0 (10.0)	14.8 (22.1)	17.6 (40.9)	19.2 (58.6)

・単位は%と頭数，（　）内が頭数。
・農業センサスより作成。

ていないために，育成牛をも含めた数値で示した）の推移である。表で見る如く道中央部（石狩空知，上川，日高）や，道南部（渡島，檜山，後志，胆振）の地域の地盤低下が目立ち，旧開酪農地域である石狩，渡島も例外ではない。それに対して道東部，道北部の前進が著しい。昭和55年には全道の71%の乳牛が十勝，網走，釧路，根室の道東部に集中する状況を呈することになる。昭和40年以降の成乳牛頭数の伸びおよび農家数の推移を地域別に見たのが表5である。40年から55年の15年間に3倍以上の増加を示したのは，やはり留萌，宗谷の道北部，十勝，釧路，根室の道東部の地域であった。一方，石狩地域はこの間25%，渡島地域は59%の成長を見ただけである。そしてこの間，農家の減少もこれら低成長の地域で著しく，空知地域では40年当時の19%にまで減じ，日高地域では26%，石狩，檜山地域でも28%にまで減じたのである。

ところで，これら乳用牛の多頭化と農家戸数の減少は，時期によって地域によってそのテンポを異にしている。同じく表5に示したように多頭化のテンポは，40年代前半に急速であり，以後

表5　乳用牛（成牛）およびその飼養農家の地域別，時期別増減

	飼養乳用牛（成牛）頭数比率				成牛飼養農家数比率			
	55年/40年	45年/40年	50年/45年	55年/50年	55年/40年	45年/40年	50年/45年	55年/50年
全　道	286	185	130	119	46	85	69	78
石　狩	125	139	92	97	28	69	57	72
渡　島	159	133	107	111	37	76	65	74
檜　山	128	103	122	102	28	60	65	71
後　志	177	144	106	116	32	84	59	65
空　知	132	92	141	101	19	50	62	63
上　川	215	134	137	116	34	70	67	72
留　萌	316	181	142	123	46	76	73	82
宗　谷	341	217	141	111	58	90	75	86
網　走	274	194	122	116	48	92	67	78
胆　振	161	160	92	110	33	83	58	70
日　高	126	121	92	114	26	72	57	63
十　勝	351	217	128	127	54	105	68	76
釧　路	318	204	146	107	58	88	78	84
根　室	464	226	155	132	69	91	84	90

・単位は%。
・農家センサスより作成。

その速度を減じる。そして近年，石狩，胆振，日高の各地域のように，絶対数として減少している所も生じてきている。

それにしても40年から45年にかけての乳牛飼養頭数の伸びは著しく，この5年間に道東部，道北部の各地域はほぼ倍増するのであるが，これらの中で十勝と網走の地域はもともと畑作経営が進んでいた地域であり，この間に相当の農家が畑作から酪農へとの転換，ないしは従来の経営への酪農部門の組み入れ（「畑酪（はたらく）」農業）を行なったものと思われる。この間の網走地域の酪農家戸数の減少は8%に留まり，十勝地域ではむしろ5%の増加をみている。

北海道における酪農はもともと，耕種や粗飼料作のない搾乳専業経営（もっぱら購入飼料に依存）の方向では発展してこなかった。すなわち北海道における乳用牛飼養は，飼料作(特に牧草)への依存が極めて大きなものとしてある。よって，ここではデータを示すことは省略するが，上け見てきた乳用牛飼養の多頭化現象は，一方で経営耕地の規模拡大を伴なって進行しており，また，そうする必要があったのである。そして，かかる拡大に対する制約のより少ない（地代の安い）地域へと酪農地帯の立地移動を引き起こしたと云えるのである。

ところで，「限界地帯」としての道東部[22]，特に根釧地域は，この酪農の立地移動を受けとめるに格好の場所であった。一方には近年まで未開拓地が広大に残されていたし，またこの限界地帯では下層零細農の没落はストレートに離農に結びつき[23]，このことは跡地取得による残留農家の規模拡大を可能にしてきた。そして，上からの政策的諸措置も特にこの地に重点的に施される。この地域は30年代には，当時の実現努力目標モデルとしてのパイロット・ファームを擁していたし，40年代には新酪農村建設の舞台にもなっている[24]。

そして，先の表5で見たようにこの道東部（特に根釧）の酪農離農率が他地域に較べて一段と低く，40年当時の6割水準を現在保持しえている。これは，一つにはこの地域が酪農でしかやっていきえないために酪農に縋っている姿であり，他方では，大規模な専業酪農家を成立させての酪農地帯を形成せしめたがゆえの結果でもある。

以上簡単に，北海道酪農業における道東の位置を鳥瞰してきたが，以上のことからも道東は最もドラスチックに酪農地帯を形成してきた地域と云えそうである。以下，どのようなプロセスをとって，この酪農地帯が形成されてきたのかを，そして，現段階でどのような問題を抱えているのかを，より実態に接近した形で探っていきたい。この際，第1章で述べた問題意識を背後に持ちつつ，標茶町弥栄地区に事例をとって行なっていく。

Ⅳ　弥栄地区にみる酪農業発達史

(i)　緊急入植・開拓者農業時代（昭和20年代）

戦後本町は，年々多数の入植者を迎え，農家の6割余が戦後開拓者によって占められることになる。そして，20年代の標茶町は，開拓者農業の町と称しても誇張ではない[25]状況を呈するのである。

弥栄地区は前出の図2に示した如く，標茶町市街地から北6～15km に広がって位置しており（行政集落名としては上多和），やはり戦後の開拓地として拓かれた所である。

22年度に初の44戸の入植が行なわれ，以後34年度までに年1～2戸の追加入植が続き，合計で65戸の入植農家をみるのである。そして，彼等のうち52戸が山形県，新潟県，岩手県等東北方面中心の出身者で，かつ，旧満州からの開拓引揚者によって占められていた。とりわけ，「満州」開拓の第一次武装移民団であった弥栄（いやさか）開拓団員が29戸を数え（当地区の「弥栄」名はこれに由来する），さらに9戸の「満蒙開拓青少年義勇隊」出身も含まれていた。

「満州」開拓の困難な状況や，その存在の現地民との関係，開拓者家族の終戦引揚時の悲惨さ等について近年多くの出版物が刊行されだし，徐々にその実態と本質が明らかになりつつあるが[26]，ともあれ旧日本帝国主義による大陸侵略の最先端の修羅場を潜ってきた人々によって，当地の開拓が担われることになる。

しかも，元「満州」開拓移住適地調査班の総括班長であり，のちの「満州」国政府機関の開拓研究所所長であった中村孝二郎に「指導」されての入植であり，氏も昭和32年まで10年間現地生活をし，その任にあたったのである[27]。

ところで，緊急開拓事業にはじまった戦後の北海道の未開地は，もはや劣悪な自然条件のものに局限されてしまっていたと云えよう。冷害凶作はそこでは，激しいかたちをとってあらわれる。対自然関係を変えない限り，それらの土地は限界以下の土地に留まらざるをえないものとしてあったのである。

この弥栄の地も第2章で触れたように厳しい自然条件を背負った限界農業地としてあり，火山灰土壌や頻発する冷害のことを考えれば，この地の安全適作物として，地下部分を収穫する根菜類（特に甜菜と馬鈴薯）と茎葉を利用する牧草類を中心に考えることが当然である[28]。よってこの地域での農業は「穀菽（こくしゅく）農業」（菽は豆類の総称）ではなくて「主畜農業」でなければならないであろうことは充分予想されたことであった。

しかし，さしたる蓄えもなく「裸一貫」の身で，しかも森林地帯に入植した彼等にとって，そのような「営農」形態にまでもっていくことは容易なことではなかった。主畜農業の段階に達するのは30年代に入ってからであり，当初は伐り拓いた土地にまず，自給生活用のソバを播かねばならなかったし，馬鈴薯の他にも小麦や菜豆も作らねばならなかった。役畜としての馬の飼料用の燕麦耕作も欠かせぬものであった。

20年代後半の当開拓地の土地面積は2,300町で，このうち個人割当地が1,100町（1戸当りほぼ20町。ただし初期には約10町の個人分配であった），23年設立の弥栄開拓農協の所有地が1,250

表6　弥栄地区農家の作付状況（昭和28年）

農家番号	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8	No. 9	No.10	平均
大麦	2.0	4.0	—	—	2.2	3.5	2.0	0.3	1.0	4.0	1.9
小麦	5.0	2.5	2.0	—	4.0	1.0	3.5	2.0	1.0	1.5	2.3
ソバ	3.0	3.0	—	4.0	—	—	5.0	—	3.0	—	1.8
大豆	1.0	2.5	5.0	2.0	1.5	1.5	1.0	1.5	1.0	0.5	1.7
小豆	0.5	1.5	0.2	1.0	0.5	—	1.6	0.5	—	—	0.5
菜豆	3.0	4.0	1.0	2.0	3.0	1.0	1.2	1.0	2.0	—	1.8
トーモロコシ	1.0	2.5	1.0	1.0	2.0	2.0	0.8	1.5	1.0	1.0	1.4
イナキビ	3.5	2.0	2.0	2.0	2.5	2.5	2.0	0.5	1.5	0.8	1.9
馬鈴薯	6.0	5.0	4.5	5.0	6.0	4.0	4.0	3.0	3.0	4.0	4.5
ビート	2.0	3.0	2.0	4.0	2.5	2.3	2.6	2.0	1.5	2.0	2.4
アマ	1.0	2.0	—	1.0	1.5	—	—	—	—	—	0.5
エンバク	3.0	3.0	5.0	6.0	6.0	4.5	3.5	3.5	1.0	3.0	3.8
デントコーン	1.5	1.0	1.5	1.0	3.0	3.5	1.0	2.0	1.0	1.5	1.7
ヒエ	5.0	3.0	—	4.0	3.0	—	—	1.0	1.5	—	1.8
ルタバカ，飼料カブ	2.5	2.0	2.3	2.0	3.0	4.5	—	1.0	1.0	2.5	2.1
野菜(カボチャを含む)	3.0	2.5	2.5	5.0	2.0	2.5	1.0	2.0	3.0	2.0	2.5
緑肥	—	—	2.0	—	1.5	—	—	—	—	—	0.3
牧草	35.0	15.0	20.0	9.0	2.0	12.0	17.0	7.0	6.0	1.5	12.5
計	78.0	58.5	51.0	49.0	46.2	44.8	45.2	28.8	28.5	24.3	45.4

・単位は反。
・肥料カブと緑肥はほとんど混播される。
・加納瓦全・小関隆祺「開拓地農家経営における農林提携に関する実態調査（I）」より引用。

町であった[29]。個人割当された土地は20年代（22～29年）に全体として331.5ha の開墾が行なわれ[30]，これは年40ha のペースであり，一戸当りで年間に約0.74ha 位が開墾されたことになる。そして，20年代後半には各農家は4～6ha の耕地を所有するに至るのである。

前述したように加納らは，28年10月に当地区に調査に入り，全農家56戸のうちから10戸を選んで28年度の作付状況を聴き出している。表6がその状況である。牧草地が農家平均で12.5反と最も大きく，次に馬鈴薯，燕麦といったところが大きい。ビート（甜菜），亜麻，馬鈴薯（特に都府県への種芋）は換金作物である。牛馬のいる有畜農業のため燕麦，デントコーン，ヒエ，飼料カブといった作付面積も大きく，一方で他の自家用作物もいまだかなりの面積で作付されていたことが分る[31]。

当初の開墾は鋸と鉞で森林伐倒に挑み，島田鍬と称せられる鍬一丁で抜根と耕地の手起し作業が行なわれたが，ほど無くこの過程に馬が導入される。そしてほぼ1戸に付き2～3頭の馬が飼養され，2頭だてでプラオを曳かせることが一般的になってくる。最も労苦を要した抜根作業も馬力を利用して進められることになる。この馬の購入には3万円程度（20年代前半）要し，馬は当時20年代の開拓農家にとっては一大財産であり，かつ，欠かせぬものであった。

京大北海道演習林は，27～36年にはかなりの量の官行斫伐を実施していたが，この木材搬出過程にはこれらの中の屈強な馬が使用され（「玉曳」なる馬搬），弥栄地区からも数戸の農家であるが常時冬期にこの馬搬に従事する者が存在した。玉曳には玉橇への積み込み等の高度の技能と熟練が必要であり，また，搬出作業期には特に燕麦などの飼料を大量に与えねばならぬこともあったのであるが，それにしても一般雑役人夫賃が日に400円であり，木材伐採夫でも700円程度し

表7　弥栄地区農家の現金収入（27年10月～28年9月）

農家番号	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8	No. 9	No.10	平均
耕種収入	516	663	891	970	835	402	828	336	205	336	598 (24)
家畜収入	183	174	242	220	415	555	182	487	71	46	257 (11)
林業収入	2,170	620	1,100	1,240	720	1,230	930	704	1,225	770	1,071 (44)
賃労働収入	105	30	—	690	105	15	53	615	24	9	165 (7)
補助金収入	400	220	140	—	220	380	—	240	—	—	160 (7)
保険金収入	—	500	—	—	—	200	—	—	—	—	70 (2)
特殊職業その他収入	—	45	162	741	—	120	—	—	—	180	125 (5)
合計	3,374	2,252	2,535	3,861	2,295	2,902	1,993	2,382	1,525	1,341	2,446 (100)

・単位は100円，（　）内は%。
・加納瓦全・小関隆祺　前掲論文より引用。

か稼ぎ出せない時代に玉曳馬搬は1,600円水準の日当をひき出していたのであり（27年度演習林資料による），このことからも厳寒期の馬を使っての労働の厳しさと馬の貴重さの一端がうかがえるのである。

ところで，森林の開墾過程で産出される木材を利用しての製炭は，早や22年の冬から始められ，23年より炭窯の製造が漸次進み，28年には40基を数える。そして28年度冬期には「冷害農家築窯製炭」として築窯費補助を受けたこともあって，30年前後期には木炭生産の最盛期を迎える。

それはあくまで副業的製炭の域を出るものではなく，30俵焼きの窯を2基ほど所有しての年500俵程度の生産であった。が，しかし，このような開拓民による製炭の広汎な存在と他地区でのこれらとほぼ生産総量において同量の企業製炭の存在によって，標茶町は北海道における戦後最大の木炭生産地を誇り，昭和30年度の全道生産量324万俵の約20%を占めるに至っていたのである[32]。

このように入植者は20年代において開墾，製炭，耕種，養畜に労働を注ぎ込んでいたのであるが，どのような種類と量の現金収入を得ていたであろうか。先と同じ10戸の農家で28年調査におけるその状態を見ると表7の如くである。

この表で見るように当時の現金収入では，林業収入が最も重要な地位を占めていたことは明白である。そして，この林業収入には一部用材販売や薪販売による収入も含まれるが，大半(74%)は木炭販売による収入であった。

一戸当り平均年収は24万5千円弱であったが，次いで多い部門は馬鈴薯，甜菜，亜麻の販売による耕種収入であり，それらは全体の24%を占めている。

家畜による平均収入はいまだ11%の2万6千円弱に留まっており，うち牛乳販売収入は13,400円と全体の5%を占めるに過ぎない。なお賃労働収入は2戸が冬季の林業労働に従事して得たものであり，他はすべて組合への義務的出役としての収入である。ここ弥栄地区には当時，賃労働（この地方では「出面とり」と呼ばれる）の機会が木材の伐出生産を中心になくはなかったが，そのような出面とりに出ることは開墾を放棄するに等しかったのであり，もっぱら当時の「副業」は製炭であったのである。

当時の農家の「収入」を，開拓農協を通じたもので押えなおしておくと表8の如くである。29年と30年に「冷害資金」が特別に導入されたために長期借入金（開協からは貸出事業）が著しく脹らんでいる。木炭はこの開拓農協以外のルートでも相当出荷されていたが（開協のシェアーは

表8　開拓農協を介しての弥栄地区の「収入」

	組合員数	長期借入金	開墾補助金	木炭販売額	牛乳販売額	馬鈴薯販売額	甜菜販売額	亜麻茎販売額	合計
昭和28年	66戸	1,624 (17)	2,021 (21)	2,892 (31)	1,124 (12)	1,173 (13)	544 (6)	0 (0)	9,378 (100)
29年	71	3,408 (28)	1,361 (11)	3,081 (25)	2,126 (18)	971 (8)	1,159 (10)	0 (0)	12,106 (100)
30年	68	5,592 (35)	1,641 (10)	2,238 (14)	3,102 (20)	1,598 (10)	1,660 (11)	58 (0)	15,889 (100)

・単位は千円，（　）内は%。
・組合員には磯分内の一部9戸が含まれている。
・29年，30年には冷害による「冷害資金」が導入されているため長期借入金が急増している。
・開墾補助金を受けた開墾面積は28年が61.3町，29年が39.4町，30年が43.5町。
・弥栄開拓農協『業務報告書』より作成。

年によって変動があったが約3割程度だったという），この表でほぼ当時の弥栄の模様を推し量ることができるであろう。

すなわち，入植当初は開墾補助金および政府資金[33]によって開墾，営農をなし，自給作の他に馬鈴薯，甜菜，亜麻（亜麻は当時標茶町全体としては相当盛んであったが弥栄ではそれほど作られはしなかった）の換金作を作付し，そして製炭によって（これらに一部副業的馬産が加わり）生計をたてていたのであるが，20年代後半にはそこに酪農による収入がつけ加わってくるのである。後述することであるが，27年9月に牛乳処理所が落成し，28年6月から本格的に集乳を開始したこともあって，それ以降，牛乳販売量が急増していくことが表にもよく現われている。しかし，現在と比して酪農がいかにも低水準で，いまだ萌芽状態にしかなかったことも確認しうるであろう。次にこの20年代の酪農について述べておこう。

当弥栄開拓地に初めて乳用牛が導入されたのは22年の秋であり，食糧欠乏の最中の自分達の栄養補給を考えて，山形県出身の一つの班が虹別から搾乳牛2頭を購入したものである。特に幼児を中心に希望者に生産乳が配給される形での乳牛飼育の出発であった。次に24年に，23年度開拓者資金融資によって7戸が2才牛を導入している。

20年代の乳用牛の導入はほぼ「制度牛」のみと見てよいが，その年度別導入数は表9の如くである。貸付牛とは，例えば「道有牝牛貸付事業」にみるように，道が牝牛を市町村・農協等に貸付け，その市町村・農協等が農家に対して飼養管理を委託する形式をとり，借受者は5年以内に生まれた牝犢を返納すれば，借受牛の無償払下げをうけられる[34]といった仕組みのもとに導入されたものであった（このような現物貸与が当時多かった）。

昭和24～25年頃まで生産乳は，もっぱら自家用ないしは地区内の飲用に消費されていたのであるが，乳牛の頭数も次第に増え，やがて他地域への出荷販売を志向するようになる。しかし，ク

表9　制度種類別の乳用牛導入数の推移

年度	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39
開拓者資金		7		20	4	15		12	14	5						20	15
道有貸付牛				5	5	5	1	3	7	3	7	2	3	3		2	5
町有貸付牛			1	1	1	1		1	2	1	1	2	4	6	1	2	
国有貸付牛										20						20	

・単位は頭数。
・弥栄部落会『拓魂三十年』p. 52より引用。

ロバー・バター（現雪印乳業）標茶集乳所までの出荷は思うにまかせなかった。そこで前にも触れた牛乳処理所を当地区内に設置しなければという気運が高まり，開拓農協事業として取り組むことになる。

この牛乳処理とは，牛乳を分離機を使用して乳脂（クリーム）と脱脂乳に分離処理することで，前者の重量は約1割にまで減じる。このクリームは国鉄バスで標茶駅まで搬出され，それよりは貨車で釧路のクローバー・バター工場に出荷される。そして，脱脂乳は持ち帰られて犢牛，豚，鶏等の飼料として使用する。このような体制がここに整ったのである。

牛乳の受入れは午前6時頃から8時頃までで，この時間になると組合員が馬車に輸送缶を積んで続々と詰めかけ，自分達で手廻分離機を交替で廻し，帰りには還元脱脂乳を持ち帰ったという。操業の始まった頃の地区の搾乳牛は27頭位で，2頭以上飼養している農家はなく，処理所の受入は15戸，2日に1回の受入れであった[35]。29年度の集荷量は110トンで，この期の地区全体の販売量が，現在の農家1戸分の約半分といった水準にあったのである。

以上見てきたように，20年代の入植者は森林に立ち向かい，その立木を伐倒して開墾することを所期の目的として辛苦な労働に励んでいたのであるが，その生活はまさに「立木に扶けられ」[36]てのものであった。森林は製炭用原料を提供したし，また，彼等の家屋の素材を直接的な形で提供した。ハンノキは細工のしやすい格好の板材になったし，ナラは土台や柱材に，そして密生したドロノキ，シラカバはタルキ材として利用され，笹は屋根に敷かれたのである。人々はまた，森に入って魚（特に鱒）を漁り，山菜を採取した。それらは日常の生活をするになくてはならぬものであった。この時代の森林はまさに源基的な生産手段として機能していたと云えるであろう。

なお，前述の牛乳処理所の他に，この時代の開拓農協の利用事業として木工場（製材を含む），農産加工場（製穀，製粉，搾油等），家畜診療場，装蹄鍛工場（装蹄，農具修理，建築用小金具製作）が操業し，地域の共同利用施設として欠くことのできぬものとなっていたことを付け加えておく。（以下次号予定）

引用文献および注釈

1) 小関隆祺　「北海道林業の発展過程」，『北大演習林報告』，Vol **22** No. 1, 1962, p 51
2) 小関隆祺　「戦後の北海道林業の展開」，『北海道林業の諸問題』1968, p 349
3) 上田弘一郎　「北海道演習林，獲得のいきさつ」，『北海道演習林新庁舎落成によせて』1980
4) 昭和32年度から10ケ年計画で，未立木地の一大団地7千haにマラマツの一斉造林を行った。
5) 帯広営林局　『パイロット・フォレストの歩み』1965, p 114
6) 加納瓦全・小関隆祺　「開拓地農家経営における農林提携に関する実態調査（I）」，『北大演習林報告』，Vol **17**, No 1, 1954
7) 『54年度林業白書』，森巌夫『「山」の政治と経済』1980
8) 鈴木尚夫　「林業の構造矛盾をめぐって」『林業経済』1981，1月号
9) 赤羽武　「"地域林業"論の座標軸」『林業経済』1980，12月号
10) 標茶町　『標茶町農村総合整備計画書』1979, p 17
11) 彼等の状態は，北海道庁殖民課『北海道殖民地撰定報文』（明治24年）に次のように記されている。すなわち，「塘路（トウロ）土人ノ戸数二十五，人口四十人女六十六人」で，その生活状況は「夏ハ，ハナウド，蕎麦，葉貝母，菱（ヒシ）ヲ採リ傍ヲ数畝ノ地ヲ拓キ馬鈴薯，粟，蕎麦等ヲ耕種シ河ニ鱒湖ニ鮒，鰕ヲ漁シ冬ハ鮭及狐，狸，水獺，或ハ専ラ熊羆ヲ猟シ以テ三冬仲春ニ至ルヲ常トス」と。
12) 標茶町の歴史に関しては，標茶町『標茶町史考』（前篇1966，後篇1978，いずれも対象は戦前期），および，佐藤尚『釧路川紀行』（1977）を参考にした。
13) これは，熊牛，弟子屈，屈斜路，虹別，塘路を管理する熊牛外四ケ村の戸長役場として設置されたもの。その後，「熊牛村外二ケ村」（熊牛村，虹別村，塘路村）時代を経て現在の標茶町は熊牛村となり，昭和4年に名称を標茶町と改める。なお，「熊牛」の語源はクマ（魚を干す竿），ウシ（有る）なるアイヌ語にあり，魚＝鮭がたくさん獲れて干し場のある場所の意味をもつ。

14) この状況は吉村昭の小説『赤い人』(筑摩書房，1977) を参照のこと。
15) 佐賀の乱，西南の役，自由民権運動と続く政治そして経済の激動期であったことを想起せよ。
16) 元軍馬補充部職員の後藤理策氏 (71才) によると1牧区に100頭位づつ放馬されており，そこに4～6人づつの牧手がいて塩，カルシュウム，水を与えていた。日に2回は集めて水をやり，馬の状態を見るのが日課で，事故による減耗馬を防ぐために谷筋等に牧柵を施したり，危険木を手入れしたりしていた。冬は穴むろでの泊り込み生活で，ササの芽が出る6月だけは厩舎飼いであった。
17) 多和および磯分内には分厩(ぶんきゅう)が置かれ，この多和分厩の跡地に現在当演習林の事務所が所在している。
18) 前掲『標茶町史考　後篇』p 416。なお，軍馬補充部の“間伐”(ササ出しのための) 材を請けて製炭に従事していた遠藤茂文氏 (88才) は，この仕事につくまでは隣村の鶴居村で畑作と軍馬生産で生計をたていたと云う。氏は親馬で約30頭を官林に放牧していた。100頭，200頭放している人もいて，それぞれが「焼バン」なる刻印を入れての共同放牧であったと云う。
19) 高岡縫(ぬい)殿という19才の青年に率いられての，農民を中心とした大工，左官，鍛冶職人など11戸47名の集団で，貫誠社と称していた。チャーターしたカムチャッカ漁業の帆船に3年間の食糧を積み，勇躍故郷を後にし，3ケ月を費して到着したという。しかし，結果は惨敗で定着を見なかった。(前掲『釧路川紀行』p 98)
20) 関東大震災被災民の集団収容を直接の契機とする指定地入植制度に基づいた移民。
21) 千葉燎郎　「乳牛多頭飼養農家の類型と構造」，『農業総合研究』Vol **19**, 第3号，1965, p 74
22) 湯沢誠他　『限界地帯農業の展開構造』，1963
23) 田畑保　「北海道酪農の現状とその問題」，『農業総合研究』Vol **30**, No 2 1976, p 102
24) パイロット・ファームは別海町床丹地区に機械開墾と集中投資のモデルケースとして建設されたもので，当初計画では成乳牛 (ジャージー種) で10頭，耕地規模で14haの営農 (他に馬，豚，鶏，めん羊がいる) を目ざし，31年度より入植，約400戸の「中農」を創設せんとしたものである。一方，新酪農村とは「広域酪農開発事業」の通称で，根室地域農用地開発公団が事業主体となって「大型で高能率の畜産経営群」を早急に創出するための各種事業を行なっている(48～55年度)。目ざす基本営農類型は，農業従事者2人で経営農用地50ha，乳牛 (ホルスタイン種) 飼養頭数68頭 (うち成牛50頭)，年間生乳量220 t の酪農専業経営で，一挙にこの規模を狙った94戸の「個別建売牧場」(これだけの一戸分建設費が1億6千万円) の建設も進んでいる。
25) 加納瓦全・小関隆祺　前掲論文，p 63。なお本章は，この論文と弥栄部落会『拓魂三十年』1977，中村孝二郎『原野に生きる』1973，を参考にし，個別農家 (10戸) からの聴きとり調査と弥栄開拓農協資料調査を踏まえて叙述していく。
26) 特に上笙一郎　『満蒙開拓青少年義勇軍』，1973。
27) これは，氏の「大陸開拓に敗れた責任」(前掲書 p 250) の一つのとり方であったかも知れないが，あのような形の大陸開拓を推進したこと自体の責任に関しては著書は一切触れていない。この現地生活も，真の責任追及をかわすための一種の「逼塞生活」であったという見方も可能かも知れない。
28) 中村孝二郎　前掲書，p 252。
29) 加納瓦全・小関隆祺　前掲論文，p 57。
30) 弥栄部落会　前掲書，p 142。
31) W. H 氏の話では，当時の主食は次のようなものであった。朝は麦7分米3分の御飯。昼は「そばぴん」で，そば粉をボールの中に入れて脱脂乳でとき，塩，サッカリンを加えて薪ストーブに乗せて焼いたもの。夜は澱粉団子かうどん (乾麺を大量に買って置いてあった)。
32) 小関隆祺・霜鳥茂　「木炭の生産流通機構—北海道釧路国標茶町の調査—」，『林業経済』1957，10月号，12月号。
33) 開拓者資金融通法 (昭和22年) に準拠して貸出されたもので，うち一般営農資金は現金貸出であったが，他は農機具，家畜，土壌改良資材等の現物支給形態をとった。
34) 農政史研究会　『戦後北海道農政史』，1976，p 220。
35) 弥栄部落会　前掲書 p 53。
36) 中村孝二郎　前掲書，p 189。なお，この頃に木炭や木材を取扱っていた者で，現在の標茶町の主な業者 (製材所，造林請負業者はもとより，ガソリン・スタンド，タクシー，旅館，食堂，商店そして土木建設事業等の経営者) が形成されている。

Résumé

The Hokkaido Experiment Forestry of Kyoto University is situated in Eastern Hokkaido, where the dairy-farming has developed as the most basic industry and farmers have continuously made pastures from forest lands. Then in this district, there is a competitive

relationship between the forestry and the dairy-farming about the utilization of the forest lands. But on the other hand, at a certain stage of the development the forestry played an important role for the farmer's management.

The author investigated Iyasaka, the nearest village from our Experiment Forest this time, and made a research on the actual condition of the historical process of the dairy-farming development. In this paper the author mentioned about the condition before the stage in which the special dairy-farming has been formed.

The settlers began the exploitation work from 1947 in Iyasaka, and about for ten years their cash income mainly depended upon the sale of forest products, especially charcoal making.